

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

能界展望(平成二十七年)

著者	山中 玲子
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	42
ページ	143-150
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/13785

能 界 展 望 (平成二十七年)

山中 玲 子

はじめに

この年の最も大きな話題は、3月末の観世能楽堂の閉館だろう。観世能楽堂は昭和47年、大曲から渋谷の松濤へ移転。その際、総檜の舞台も新造され、以来43年間、観世流の本拠地となってきたが、近年は建物の老朽化が進み、耐震構造の上での心配があることや、住宅地であるため建て替えも難しいことから閉館を決意したという。移転先は、観世家ゆかりの地でもある銀座に2017年春オープン。複合施設「銀座シックス」。さまざまなメディアで報じられた閉館の話題の中に、観世清和(清河寿)氏の「(開場当時の舞台は)檜の粉が拭いても拭いてもわき出て、木くずの中で舞った。開場数十年、檜の匂いがした」という思い出を伝えるものがあり(「産経ニュース」インターネット版。2015年1月4日配信)、印象深かったが、その舞台は解体し新能楽堂に移築するという計画である。

松濤の能楽堂では、3月27日から30日の四日間、「観世能楽堂さよなら公演」が催された。各日の上演曲とシテは次の通り。

- ・ 3月27日 井筒(野村四郎) 安宅(観世鍔之丞)
- ・ 3月28日昼 羽衣(谷村一太郎) 正尊(観世清河寿)
- ・ 3月28日夜 松風(梅若玄祥) 土蜘蛛(観世恭秀)
- ・ 3月29日 道成寺(観世清河寿) 石橋(山階彌右衛門、観世芳伸)
- ・ 3月30日 翁(観世清河寿) 鶴亀(観世芳伸) 狸々(関根祥六)

また、雑誌『観世』は4月～6月号にて小特集「さよなら観世能楽堂」の企画を組み、4月号に「観世能楽堂閉場にあたって」(観世清和・観世鍔之丞・関根祥六・観世喜之・梅若玄祥執筆)と能楽堂フォトツアー①、5月・6月号に、児玉信「観世能楽堂の軌跡その壺・式」と能楽堂フォトツアー②③を掲載、6月号には、3月の「さよなら公演」の簡単な記録(村上湛・天野文雄・増田正造・松岡心平執筆)も掲載している。右の児玉稿によれば、観世能楽堂での公演は計7337回を数えるとのことである。

飯田橋近くの大曲にあつた能楽堂を知っている人は、もはや数少ないが、これからは、松濤の観世能楽堂を知らない人たちが増えていくことになる。場所も人も移り変わっていく

のは当然のことで、「○○を知らない世代」と「知っている世代」は、いつの世もゆっくりと交代しながら能の歴史を支えてきたのだ。人について言えば、この年も、観世幽雪氏、近藤乾之助氏をはじめ、長く能界の中心にいらした方たちとのお別れがあった。

能をとりまく世界も能界自体も、大きく変貌しつつある。

気がつけば、稽古を回数券制にしているという話もそう珍しくなくなってきた。新作能や復曲が珍しかった時代には、それがその年の能界を特徴づける出来事だったかもしれないが、今や日常茶飯事となっている。海外公演も同様だ。以前のよう大型予算を組んで大々的に出かけるというより、最小限の人数、短期の日程で、多様な地域に向けて発信が行われている。そうした試みを、能楽タイムズやその他の記録から集めてここにまとめて記録しておくことの意義はもちろんあるが、特殊な形態ばかりを強調すれば、通常の公演に現れる変化が見えなくなるおそれもある。むしろ、現在の能界を取り巻く問題は、各流定例公演のような従来型の催しにおける観客の高齢化や減少、素人弟子の減少などに、現れているようにも思われる。本誌の「能界展望」のあり方も、考え直すべき時がきているのかもしれない。以下では、なるべく新しい動きに目を向けながらも、この年の能界の様子がわかるような出来事や催しを拾っていきたいと思う。網羅主義を取る力も時間もないので、当然触れるべきできごとを落としている場合もあることをあらかじめお詫び申し上げる。

さまざまな催し

冒頭に掲げた「観世能楽堂さよなら公演」のほか、一般社団法人能楽会の新会員披露記念会（3月17日観世能楽堂。無料）が行われ、新会員による舞囃子、独鼓、仕舞、袴狂言等の披露があった。10月9日の鉄仙会定期公演（宝生能楽堂）は、同会の90周年記念を銘打った催し。番組は通常通りの構成で、狂言（連歌盗人）（野村万作）、能（江口干之掛）（観世鍔之丞）。このほか、個人の還暦や喜寿、卒寿などを祝う催しや、故人の追善の会も数多くあったが、省略する。

【復興支援能】

震災後四年目のこの年も、復興支援能が複数行われている。◎東日本大震災復興支援チャリティー「小牧能」 2月28日。小牧市市民会館ホール。能（吉野天人天人揃）（今澤美和）・狂言（佐渡渡）（井上松次郎）・能（船弁慶前後之替）（久田勘鷹）ほか。

◎第五回「東日本大震災義援能」 3月10日。京都観世会館主催。京都観世会有志、協賛。京都ワキ方高安流有志、京都能楽囃子方同明会有志。昼夜二部制。半能（絵馬）（片山九郎右衛門）・能（一角仙人）（浦田保親）ほか舞囃子・仕舞等。◎第五回「東日本大震災義援能」 3月11日。大阪能楽会館主催。大阪地区能楽師有志。能（羽衣和合之舞）（梅若猶義）・半能（融）（大西礼久）ほか舞囃子・仕舞・一調・一管等。

◎「息吹の会」 4月22日。須賀川市文化センター。能(小鍛冶黒頭)・観世清河寿)・狂言(棒縛)・善竹富太郎)ほか舞囃子・仕舞等。同会については、本誌40号「能界展望(平成24年)」参照。

◎東日本大震災復興支援「東北の芸能VI ～みちのくのオニ～」 4月11日。国立劇場。宮城県「大室南部神楽」「田村三代」、岩手県「鬼剣舞」、秋田県「男鹿のナマハゲ」、岩手県「野田村のなもみ」とともに、山形県「黒川能」の(黒塚)(黒川能上座)上演。

【新作・復曲・他ジャンルとの融合など】

この分野では、国立能楽堂、横浜能楽堂、豊田市能楽堂など、公共の能楽堂での意欲的な催しが目立った。主な催しは以下の通り。

◎国立能楽堂企画公演「能を再発見するVI―世阿弥の花筐―」 2月19日。世阿弥作(花筐)に本来あった曲舞は、現在の「李夫人の曲舞」ではなく金春流のみに残る「曙の曲舞」であったという見解に基づく復曲。3年がかりで全6回のシリーズ企画「能を再発見する」の最終回。大槻文蔵、福王茂十郎ほか。

◎横浜能楽堂特別公演 2月21日。復曲(綾鼓)。浅見真州、福王茂十郎ほか。観世流では六百年ぶりの復曲を謳う。竹本幹夫・三宅晶子監修。

◎豊田市能楽堂特別公演 3月15日。復曲(吉野琴)。片山九

郎右衛門、宝生欣哉、竹市学、林吉兵衛、国川純、前川光範ほか。

◎新作能(針間)披露公演 3月16日。国立能楽堂。梅原猛作。半能形式での上演。大槻文蔵、藤田六郎兵衛、田辺恭資、上田哲也ほか。

◎新作能「オセロ」 4月26日。大阪府羽衣学園講堂。泉紀子脚本・作詞、辰巳満次郎節付・演出。辰巳満次郎、和久莊太郎、福王和幸、野村萬斎、竹市学、大倉源次郎、大倉慶乃助、中田弘美ほか。

◎新作能(冥府行「ネキア」)ワールドプレミア東京公演。7月15日。国立能楽堂。【能楽の国際化】の項参照。

◎復曲能(菅丞相) 8月2日。京都芸術劇場春秋座(京都造形芸術大学内)。大槻文蔵節付・型付・演出、天野文雄監修。大槻文蔵、大槻裕一、福王茂十郎、茂山茂、杉市和、吉阪一郎、河村大、前川光長ほか。

◎「寂寞「JAKMAK」」 9月10日。福岡サンパレスホテル。梅若玄祥、葉加瀬太郎ほか。前年京都上賀茂神社での催しの再演。

◎国立能楽堂企画公演新作能(紅天女) 9月25日。美内すずえ作「ガラスの仮面」より。梅若玄祥、福王和幸、茂山七五三、茂山千三郎、藤田六郎兵衛、大倉源次郎、亀井広忠、加藤洋輝、観世喜正ほか。月影千草役の朗読に岩崎加根子。

◎現代能(長崎の聖母) 11月3日。長崎大学。【能楽の国際化】の項参照。

◎万作を観る会狂言(橋山節考)。11月25日・29日。国立能楽堂。深沢七郎原作、岡本克巳脚色、野村万作演出。昭和32年12月「第14回冠者会」で上演されて以来58年ぶりの再演。野村万作、野村萬斎、深田博治ほか。

◎新作能(ロミオとジュリエット)。12月8日。国立能楽堂。上田(宗片)邦義作、野村四郎節付・作舞、笠井賢一演出。野村四郎、鶴澤久、松田弘之、古賀裕己、大倉正之助、徳田宗久ほか。

【能楽の国際化 海外公演など】

従来は、能楽の国際化とはほとんど、日本のプロの能役者が海外に出向き、古典作品を上演することを意味していた。

本年の例で言えば、4月13日〜20日、観世流の長島忠修ら一行によるメキシコ公演は、古典作品(葵上)の上演と外国人に向けたワークショップを組み合わせた、従来型の海外公演であった。だが、現在では、こうしたスタイル以外にも、多様な国際化が試みられている。以下では、日本を訪れる外国人に向けて能を紹介しようとする企画、海外の素材をもとに英語で作られた能の外国人による上演、現代的な課題をテーマにした新作の海外での上演など、この年に目についた新しい動きを紹介する。まずは、海外公演を三件。

◎〈長崎の聖母〉アメリカ公演 戦後70年に当たり、観世流の清水寛二ら一行が、長崎の原爆を題材にした現代能(長崎の聖母)(多田富雄作)を上演。5月14日〜16日、ニューヨーク

ジャパンソサエティ。5月20日、ボストン昭和女子大学レインボーホール。能の中にあるグレゴリオ聖歌の部分は、聖フランシスコ・ザビエル教会聖歌隊(ニューヨーク)と聖パウロ修道女会聖歌隊(ボストン)が協力して歌った。ニューヨークでは同じく戦争の悲惨を描く能として(清経)も上演。出演は、清水寛二、殿田謙吉、小笠原匡、松田弘之、飯田清一、白坂信行、田中達、西村高夫ほか。NY州立大学・マサチューセッツ工科大学等ではワークショップも行われた。11月には、核兵器廃絶を目指す科学者が集う世界大会「バグウォッシュ会議」(長崎大学)でも上演。

◎エルサレム植物園での(祈り)奉納 宝生流の辰巳満次郎ら一行による特別公演。5月27日。イスラエルのエルサレム市植物園。エルサレム市、日本大使館、エルサレムボタニカルガーデン、イスラエル外務省の主催。演目は(羽衣)と、今回特別に用意した、平和のための舞(祈り)。夜間の上演で、公演の「デジタル掛け軸」と呼ばれる光による演出(長谷川章)が施された。

◎「冥府行(ネキア)」 7月24日(金)・25日(土) アテネ・エピダウロスフェスティバル。梅若玄祥ら一行が、古代の野外円形劇場で上演。ホメロスの叙事詩「オデュッセイア」第11歌・ネキアの章を原作とする。能本補綴…笠井賢一。節付・作舞…梅若玄祥。演出構成…ミハイル・マルマリノス。能楽囃子監修…大倉源次郎。制作…アテネ・エピダウロスフェスティバル、ダンスウエスト。東京公演のパンフレット

により出演者と配役を記す。梅若玄祥(テイレシアス、鷹の魔女キルケー)、観世喜正(オデュッセウス)、馬野正基(母アンチクレア)、角当直隆(妻ベネロパイア)、山本則重(狂言おかし)、山本則秀(狂言うれい)、西尾萌(子方)、山崎正道・梅若基徳・小田切康陽・馬野正基・角当直隆・谷本健吾・松山隆之・御厨誠吾・川口晃平・梅若雄一郎(以上コロス)。囃子方は、竹市学、大倉源次郎、成田達志、亀井広忠、前川光範。

以上の海外公演は、どれも能の表現形態が持つ可能性やそこで表現しうる内容の普遍性・現代性を意識した、新しい試みと捉えることができると思う。だが、能楽の国際化は、海外に出て行くのではなく国内で待ち構えるというスタイルでも可能であり、また、日本人だけが能の国際化に貢献しているわけでもない。そのことを示す例を以下に挙げる。

◎「ブルー・ムーン・オーバー・メンフィス」能エルビス・プレスリー 5月23日。谷中「繪処アランウエスト」アトリエ。能の基本的な技能をしっかりと学びながら英語能の上演などを続ける「シアター能楽」と、「繪処アランウエスト」との協力によるアトリエ公演。午後2時と7時の昼夜二部制。能上演の前に、リチャード・エマートによる解説。デボラ・ブレヴォート原作、リチャード・エマート作調。舞台美術…アラン・ウエスト(屏風絵、中啓、北澤秀太(面)。ジョン・オグルビー(シテ)、ジュベレス・モア(ワキ)、リチャード・エマート(地頭・アイ狂言)ほか。

◎Noh Theater: Beyond Words, Beyond Borders(能 ことばを超えて、世界へ向けて) 11月21日。十四世喜多六平太記念能楽堂。アーツカウンシル東京主催。英語能やバイリンガル狂言に取り組む演者を迎え、日本語と英語2カ国語による仕舞の比較上演や、間狂言を英語で演じる2カ国語混交の能「黒塚」を上演。装束・面・楽器に触れる体験コーナーも設置。リチャード・エマート、大島輝久、茂山童司、長島茂ほか。

【その他の新しい試み・新しい動き】

新作・復曲・海外公演といった活動以外でも、通常の古典作品の上演の仕方に新しい意識が生まれてきたり新たな方法が工夫されたりしている例も、増えている。

◎多武峰談山能 5月19日。談山神社権殿。能楽の故郷を意識した催し。演能後に関連シンポジウムもあり。多武峰式〈翁〉(観世喜正・林宗一郎)、〈千手〉(観世清和)ほか。

◎礼勸進能 5月30日。賀茂御祖神社(下鴨神社)境内中央舞殿。同社の式年遷宮に合わせ、寛正五年の礼河原勸進能の舞台(橋掛が後方へ伸びる)を再現しての上演。(賀茂素勳)(観世清和・宝生欣哉ほか)。関連シンポジウム「礼河原勸進猿楽とは何だったのか―足利将軍と能楽―」(5月9日下鴨神社参集殿)もあり。

従来も廃絶曲の復元や演出上の工夫という点で実演者と研究者が協働することは多くあったが、右の二つはどちらも、より広く文化史的な視野の中での試みと言える。特に談山能

は能役者の側で積極的に進めた企画であり、演者の間にも、能のルーツや往古の能をとりまく社会・文化的状況に関する関心が強くなっていることがうかがわれる。

◎鵜澤久の会研究公演 女性の地謡による《卒都婆小町》 7月11日。喜多六平太記念能楽堂。野村四郎をシテとし、鵜澤久が地頭を勤める女性の地謡で演じる。ワキは森常好、囃子は松田弘之、吉阪一郎、亀井忠雄。鵜澤久以外の地謡は、今村都、津村聡子、谷村育子、長宗敦子、山村洋子、後田洋子、鵜澤光。

女性が能を舞う機会は増えたが、多くの場合、女性のシテが男性の地謡に支えられて舞うという形になる。その中で女性による地謡のあり方を真剣に追求してきた鵜澤久が、男性のシテにより老女物の能を女性の地謡が謡うという新しい挑戦をしたのが右の催しである。

◎大蔵流五家狂言会 5月30日。セルリアンタワー能楽堂。

歴史も芸風も違う狂言方大蔵流の五家（大蔵弥右衛門家・茂山千五郎家・茂山忠三郎家・善竹家・山本家）の若手17人が中心となって結成した会。公演は二部制で、第一回の演目は、一部…《昆布売》（善竹富太郎）、《口真似》（善竹忠亮）、《武悪》（山本則重）。二部…《仏師》（茂山良暢）、《佐渡狐》（大蔵千太郎）、《髯槽》（茂山逸平）。

狂言は、家ごと、親子兄弟ずつにかたまりがちで、細胞分

裂のように細かく分かれていつてしまうのが宿命のように見えていたが、そのような流れに逆らうようにこうした会が生まれるのはたいへん有意義なことではないか。これとは別に、流儀を超えて、大蔵流と和泉流の若手狂言師の立合狂言会という試みも2014年から行われている。

荣誉・受賞

◎芸術院賞・恩賜賞（平成26年度） 柿原崇志
能楽囃子方として多年に亘り能楽の振興発展と継承者育成に寄与した業績に対し

◎春の褒章 紫綬褒章 観世清和

◎文化功労者 野村万作

◎芸術選奨文部科学大臣新人賞 片山九郎右衛門

◎日本芸術院新会員 一噌仙幸

◎文化庁長官表彰 野口敦弘

◎観世寿夫記念法政大学能楽賞 小寺佐七・大倉源次郎

本誌41号彙報参照

◎催花賞 なごみ狂言会チエコ 本誌41号彙報参照

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》野村四郎

《常務理事》金剛永謹・観世清和・亀井保雄・豊嶋三千春・栗

谷能夫・高安勝久・荒木賀光・山本東次郎

《理事》喜多六平太(相談役)・宝生閑(相談役)・梅若玄祥・浅見真州・高橋忍・金春安明・武田孝史・藤田六郎兵衛・観世新九郎・亀井実・小寺佐七・茂山千五郎・野村萬斎

《監事》小林与志郎・櫻間金記

《顧問》西野春雄

【会員数】(平成26年7月現在)512名

◎能楽協会〔会員名簿〕平成27年版より

【役員構成】

《理事長》野村萬

《副理事長》観世鏡之丞

《専務理事》本田光洋

《常務理事》武田宗和・香川靖嗣

《理事》一噌隆之・井上裕久・大倉源次郎・大藏千太郎・金井雄資・観世元伯・観世喜正・國川純・種田道一・辻井八郎・中村邦生・成田達志・廣田幸稔・藤波重彦・前田晴啓・森常好・山本章弘

《監事》大塚和成・中村元彦・大和滋

《顧問》観世清河寿・金剛永謹

【会員数】1231名

シテ 観世411 金春107 宝生193 金剛78 喜多47 小計836
ワキ 高安14 福王16 宝生26 小計56
笛 一噌11 森田45 藤田4 小計60

小鼓 幸30 幸清9 大倉17 観世7 小計63
大鼓 葛野10 高安12 石井9 大倉10 観世2 小計43
太鼓 観世17 金春20 小計37
狂言 大蔵76 和泉60 小計136
支部別 東京586名 名古屋99名 北陸85名 京都147名 大阪151名 神戸47名 九州89名 本部扱27名

物故者

●片山幽雪

シテ方観世流(本名・博太郎) 1月13日、敗血症のため逝去。享年84。昭和5年、片山九郎右衛門家八世博道の長男として京都に生まれる。観世華雪・雅雪に師事。平成7年日本芸術院会員。13年重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)に認定。21年文化功労者。日本能楽会会員。

●安藤一郎

シテ方観世流。 1月11日、肺炎のため逝去。享年90。

●近藤乾之助

シテ方宝生流 5月1日 脾臓がんのため逝去。享年87。昭和3年生まれ。近藤乾三の長男。父及び宝生九郎重英、宝生英雄、野口兼資に師事。平成7年紫綬褒章、16年旭日小綬章。

●牛窓正勝

能楽写真家。 6月23日、脾臓がんのため逝去。享年84。ウシマド写真工房主宰。

●小山文彦

シテ方観世流 7月20日、肺炎のため逝去。享年80。昭和9年生まれ。五十五世梅若六郎に師事。梅若会所属。

●山木ユリ

能楽研究家。8月10日、老衰のため逝去。享年96。

●今井泰男

シテ万宝生流 10月28日 肺血栓塞栓症のため逝去。享年94。

大正10年生まれ。十七世宝生九郎重英、野口兼資、近藤乾三、高橋進に師事。